

書評

宇宙の観測 II—スペースアストロノミー

現代天文学講座 12, 奥田治之 編

(恒星社厚生閣, 昭和57年3月25日刊, 2800円)

早く読みたいものだと、書店に立ち寄るたびに心待ちにしている、出たとたんに、中も見ずに買い求めた本、それが本書であった。早速ひまをみつけては魅せられたように読み進み、大変豊かな気持になって読み終えた。

現代の天文学が、電磁波の全波長域に押し広げられた新しい観測により急成長を遂げたことはいままでもない。その第一の飛躍が、戦後の電波観測の発展によりもたらされ、第二の飛躍が、1960年代に幕を明けた大気圏外からの観測、すなわちスペースアストロノミーの登場によることもまた明らかである。

これらの観測技術の最前線を紹介しようというのが、この講座の、宇宙の観測I、IIである。宇宙の観測Iには、地上からの電波と光学観測の新技術が集録されている(本誌1982年7月号, 208頁参照)、宇宙の観測IIは、これと対をなす続編である。

光学観測はもとより、電波観測も、いまや実質40年近くの長い歴史があるのに対して、本格的な大気圏外観

測の歴史は、まだ10~20年に過ぎない。従って、成長が極めて急テンポであることを考えると、まとまった解説書が無かったことはうなずける。それだけに、本書の出現は極めて価値が高いといえよう。

本書の何よりの特長は、電波と光を除く電磁波の全波長域、すなわち、赤外線、紫外線、X線、ガンマ線の観測が、すべて同じ調子で一本にまとめられていることにある。そして更に、関連の深い宇宙線観測と、飛翔体打ち上げ技術の概要がつけ加えられていることも、この本の有用性を高めているといえる。

何れの章においても、どんな観測手段により、何がわかってきたかを、順序よく、ていねいに解説している。そして、同時に執筆されているから、あたかもマラソンレースを見るように、各波長域での進展状況の比較がよくできて興味深い。

いまや天文学は、各波長域が横の連携を保ちながら進歩発展してゆく時代を迎えている。天文学に関心のある人の教養の書として、また天文学を志す人の教科書として、本書の一読をぜひ推奨したい。

一つ欲を言えば、文献が全くなく、人名が仮名でボンボンと出てくることで、門外漢には少し戸惑いを感じる。これは調子が固くなることを防いでいるが、教科書としてみると、やや物足りない。(田中春夫)

わが国唯一の天体観測雑誌

天文ガイド

定価380円(〒70)'83-6月号・5月4日発売/

6月号のおもな内容

- ★へび座に新星らしい天体があることを、浜松市のアマチュアが発見。仲間の天文ファンが共同取材で、発見記をまとめました。
- ★いよいよ日食直前! 現地の状況を詳しく報告します。
- ★1982年の彗星の出現状況は? 富田弘一郎さんの解説。
- ★光学の専門家の目を見た「'83カメラ・ショー」を西条さんがレポートします。
- ★海王星が6月15日、11等の恒星をかくします。相馬充さんが撮影の仕方を説明します。
- ★6月の観測ガイドは「金星の満ち欠けの追及」です。ほかに、カスタムクラブト、同好会誌より……など

天体観測星表

7.0等までの恒星表、掩蔽される星の星表、星雲・星団の表 2000年までの太陽・惑星の視位置や物理表…を掲載。

諸数値はすべて2000年分点。掩蔽される星の表は7等星まで、SAO星表との引合せもできます。

コンピューターからの直接製版で非常に正確な、観測人必備のデータブック。

中野主一・太田原明 編/予定価3200円・4月下旬刊

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

マイコンが解く天体の謎

マイコン(FM-7/8)を使って、天体現象をディスプレイに映し出します。そして、プログラムの作成から実行するところまで、懇切丁寧に天体の謎を解明して行きます。

中野主一著/定価1600円(〒250)好評4版出来

誠文堂新光社

〒101 東京都千代田区神田錦町1-5 振替東京7-6294 電話03(292)1221